

厚生労働科学研究費補助金（肝炎等克服政策研究事業）  
分担研究報告書

行動科学に基づいた  
肝炎医療コーディネーター養成プログラム開発に関する研究

研究分担者 平井啓 大阪大学大学院人間科学研究科 准教授

**研究要旨**

最終的に肝がん罹患のリスクを取り除くために必要な肝炎ウイルス検査・治療に関するコミュニケーションのあり方について、行動科学（行動経済学）のアプローチの観点から、肝炎医療コーディネーターが身につけるべき、対象者に対する「受検」「受診」「受療」を「ナッジ」（軽く背中を押す）するためのコミュニケーション・スキルアップ研修プログラムの有用性検証の分析を行った。その結果、肝炎医療コーディネーターが患者を「ナッジ」するコミュニケーション・スキルを身につけるためのプログラム内容として、患者が陥りうる不適応状態やそのメカニズムの理解、および対象者への個別対応への認識・意欲向上のための概説やアセスメントシートを用いたグループワーク実施によって、対象患者を包括的にアセスメントすることを提案した。

**A. 研究目的**

最終的に肝がん罹患のリスクを取り除くために必要な肝炎ウイルス検査・治療に関するコミュニケーションのあり方について、行動科学（行動経済学）のアプローチの観点から、これまでの普及啓発の取組の再検討を行い、肝炎医療コーディネーターのコーディネーションにおいて必要なコミュニケーションスキルなどに関する養成プログラム開発の提言を行う。

これまでの研究において、コーディネーターは対象者を「ナッジ」するコミュニケーション・スキルとして対象者を包括的にアセスメントすべき6つの領域についての知識を身につける必要があることを提言した。本年度は、肝炎コーディネーターの患者を「ナッジ」するためのコミュニケーション

スキルを身につけるための研修プログラム開発に関する具体的な提案をする。

**B. 研究方法**

連携研究プロジェクトである、「治療と職業生活の両立におけるストレスマネジメントに関する研究」にて、がん診療連携拠点病院において身体疾患ならびにメンタルヘルスに関して両立・休職・復職支援を担当あるいは関心のある相談支援者（看護師・SW・心理職等）を対象に実施した研修プログラムにおいて、肝炎医療コーディネーションに関連する研修内容について内容分析を行った。なお、本研修プログラムは2020年11月に実施され、研修受講者（40名）に対し、研修前後にアンケート回答を求め、本研修プログラムの有用性検証を行った結果、受

講前後の「両立支援面接に対する自己効力感」の比較において、受講後の平均値が全項目において有意に向上したことより(表1)、身体疾患の治療と職業の両立における相談支援者が、患者がどのような負担を経験するか、復職後に顕在化する業務パフォーマンスの低下、過剰適応状態やメンタルヘルス不調になるメカニズム等についての理解が促進されたことが示唆された。

### C. 研究結果

肝炎医療コーディネーターの養成・スキルアップとして肝炎患者・肝炎ウイルス陽性者に対する「受検」「受診」「受療」をナッジすることを目的として、患者のストレスおよび背景情報を包括的にアセスメントするために研修プログラムに必要なコンテンツとして、以下のプログラム内容が検討された。

- ① 治療時に生じうる日常生活や業務上の不適応の特徴とそのメカニズム
- ② ストレスマネジメントの考え方や具体的方法の理解
- ③ 個別事例のアセスメントや具体的な支援策および配慮を検討するアセスメントシートの活用およびグループワーク

さらに、研修の受講感想の自由記述により、患者の支援への意欲向上、身体面だけでなくメンタルヘルスに対する配慮も必要であることに対する認識の向上が示唆された。また、研修プログラム内で示したアセスメントシートや高ストレス状態(脳疲労)尺度を、現場で活用するなど支援方略の幅の広がりに関する言及も見られた。

### D. 考察

肝炎患者、肝炎ウイルス陽性者の「受検」「受診」「受療」という行動を「ナッジ」する(軽く背中を押す)ためには、肝炎医療コーディネーターが、対象患者のキャパシティーや生育歴、仕事や生活に関する価値観をできる限り把握し、それを考慮した生活状況の課題を包括的にアセスメントすることが、対象者への対応を個別化できるスキルとして必要であると考えられる。このスキル養成のため、患者が陥りうる不適応状態やそのメカニズムへの理解促進および患者の包括的なアセスメントを行い個別対応するための研修プログラムを検討した。知識習得のための概説、およびグループワークから構成される本研修プログラムを実施することにより、肝炎医療コーディネーターが対象患者を支援するために支援への意欲や支援すべき領域への認識の向上、支援手段の習得が期待できる。またアセスメントシートを用いて包括的にアセスメントすることにより、対象患者の状況を構造的に見ることが可能となる。今後は、開発検討を行ったプログラム内容の実施、有用性検証が必要だと考えられる。

### E. 結論

肝炎患者、肝炎ウイルス陽性者の「受検」「受診」「受療」という行動を「ナッジ」する(軽く背中を押す)ためのコーディネーターのコミュニケーション・スキルとして、対象患者のキャパシティーや生育歴、仕事や生活に関する価値観を包括的にアセスメントし、対象者への対応を個別化することを身につけるための養成プログラム内容が示唆された。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

- 1) 平井 啓, 山村 麻予, 藤野 遼平, 中村 菜々子, 本岡 寛子, 足立 浩祥, 谷口 敏, 谷向 仁: メンタルヘルス受診意思決定モデルの行動経済学的検討. 日本心理学会第 84 回, 2020. 9. 8-10.

## G. 知的所有権の取得状況

なし

### 1. 特許取得

なし

### 2. 実用新案登録

なし

### 3. その他

なし

表 1. 研修受講前後の「両立支援面接に対する自己効力感」の比較  
(2020. 11. 28 にがん診療連携拠点病院の相談支援者を対象に実施。)

質問項目	研修前		研修後		t値	p値	効果量
	平均値	SD	平均値	SD			
1 社員・患者にとって、疾患や治療がどれほど負担になっているかを幅広く情報を集め、包括的にアセスメントできる	3.35	1.05	4.03	0.83	-4.075	0.000	0.65
2 入眠困難や睡眠時間だけではなく、翌日のパフォーマンスへの影響等の睡眠に関することを詳しくアセスメントできる	2.68	1.02	3.80	0.94	-6.140	0.000	1.10
3 ストレスの程度やうつ状態になっていなかをアセスメントできる	3.10	1.26	3.95	0.71	-4.607	0.000	0.68
4 仕事が社員・患者にどれほど負担になっているかを詳しくアセスメントできる	2.95	1.04	3.93	0.92	-5.394	0.000	0.95
5 社員・患者が職場に対して過剰適応していなか確認できる	2.93	1.12	3.88	0.85	-4.622	0.000	0.85
6 仕事量や職務内容が社員の状態に合っていない場合、仕事量を減らしたり、休養をとったりするための具体的なアドバイスができる	3.08	1.05	3.88	0.72	-4.639	0.000	0.77
7 メモのとり方やタイムマネジメントなど社員・患者のキャバを支援するようなアドバイスができる	2.93	1.12	3.75	0.87	-3.846	0.000	0.73
8 社員・患者にリラクゼーション・気晴らしなどストレスを減らすための具体的な方法を教えることができる	3.10	1.06	3.95	0.55	-5.667	0.000	0.81
9 社員・患者が、自分の体の状態や仕事の負担を職場や上司に対して伝える方法・言い方をアドバイスできる	3.38	1.08	3.78	0.89	-2.393	0.022	0.37
10 ストレス状態(脳疲労)の高い社員・患者に服薬を勧めたり、専門の医療機関の受診をうまく勧めたりできる	3.13	1.09	4.00	0.64	-5.439	0.000	0.80